

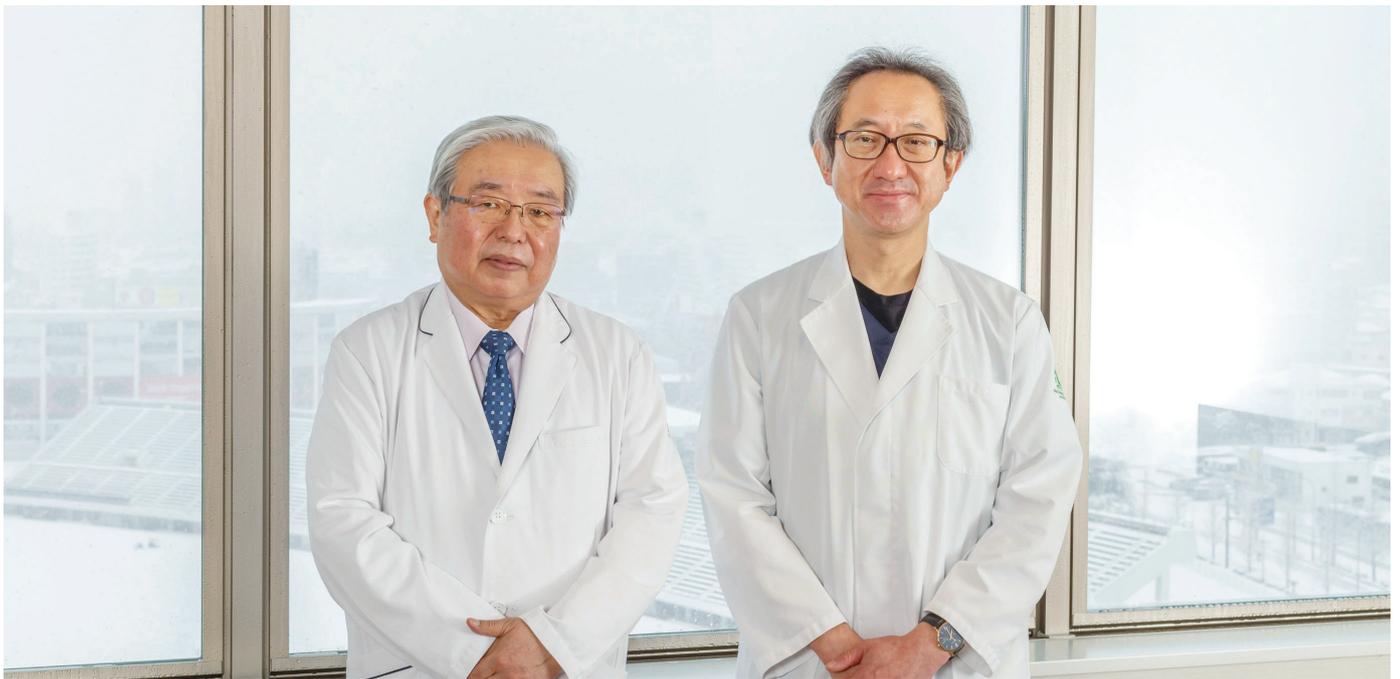
震災とNHO ~ 東日本大震災から10年、

INTERVIEW.

東日本大震災から10年

国立病院機構

01 仙台医療センター



東日本大震災の経験を活かし、 災害医療により強い病院へ

仙台医療センター 院長 上之原 広司

震災当時、私は救急部の責任者として、トリアージの指示や災害医療対策本部の立ち上げなど、院内体制を整えると同時に、当院は「基幹災害拠点病院」として宮城県の災害医療を支援する役割を担っていたため、県内の保健医療活動の

総合調整やDMATの参集拠点・活動拠点本部としての準備を進めるなど、県の災害医療を支える拠点施設としての対応にあたりました。

当院では阪神淡路大震災の後から災害訓練を重ね、医療計画や備蓄など災害への準備が整っていたこともあり、震災時は比較的スムーズな対応ができたと思っています。

また、早い段階からNHOのDMATが被災地に入り、その後次々と、全国のNHOから医療班や看護師の人的支援があったことも震災を乗り切ることができた大きな要因だと感じています。



災害医療に対応していく過程で、当然、新たな問題や職員たちの不安、ストレスも出てきますが、心掛けていたことは、情報伝達や情報共有による意思の統一と、頑張っている職員たちがしっかり休みを取れるような勤務ローテーションを徹底したことです。そうした状況のなか、NHOからの人的支援は本当に助かりました。

当院は災害拠点病院として、病院の災害訓練だけではなく、県や市が実施する訓練や、海上救急など海上保安庁の訓練などにも職員たちが積極的に参加しています。

また、東日本大震災の経験を踏まえ、2019年に移転開設した新病院は、救命救急センターを30床に増床・ERの拡張を行い、屋上ヘリポートを増設しました。整備予定の宮城県広域防災拠点に隣接する県

基幹災害拠点病院として、災害医療により強い病院を目指していく考えです。研修医や若手医師の方々にとっても、災害医療に充実強化した病院で研鑽を積むことは、医師としての大きな糧となる大変意義のあることだと思っています。



PROFILE

出身地 : 神奈川県
出身大学 : 東北大学(1982年卒)
宝物 : 家族
座右の銘 : 有言実行

熊本大地震から5年～

急性期の対応だけでなく、 その先を見据えた災害医療を

仙台医療センター

救命救急部長・救命救急センター長 山田 康雄

私は宮城県の災害医療コーディネーターであったことから、震災時は病院での災害対応とともに、航空搬送拠点臨時医療施設(SCU)での医療統括や、県災害対策本部医療班での調整業務に従事していました。東日本大震災では、住民の方々が家と町を失い、物資が不足するなかで長期間にわたる避難所の生活を強いられました。被災地へは全国のNHO病院から医療班を派遣頂き、当院は宮城におけるNHO医療班の活動拠点として機能し、2カ月間にわたって展開された東松島市以南の沿岸地域における保健医療支援の一翼を担いました。NHO医療

班とNHO派遣コーディネーターは巡回診療のみならず、地域の保健所などと協同し、住民の方々に不足している生活物資などをチェックして行政に上げ、医療の視点から地域の生活基盤を守る支援も行いました。阪神淡路大震災では、建物の倒壊などによる直接的な重症外傷やクラッシュ症候群、熱傷で亡くなられた方が多かったため、災害医療の急性期に対応できるDMATが組織されました。しかし東日本大震災では、津波によって地域インフラそのものが広範に失われたことの影響が極めて大きかったことから、急性期災害医療だけではなく、被災者の方々の



健康な生活の確保までを見据えた長いスパンの保健医療支援が必要であることを身に染みて感じました。

震災時の診療手技としては、骨盤後腹膜ガーゼパッキング(PPP)が鮮烈に記憶に残っています。重症骨盤骨折の患者さんがショック状態で搬送されてきましたが、血管造影装置ダウンのため通常行っているカテーテル動脈塞栓術が行えず、減多に行わないPPPのみを単独で施行して止血・救命できました。平時には当たり前前の医療が災害時にはできないことを痛感し、災害医療を実践するためには多様な切り札を持つておくことが大切だと肝に銘じました。また、実災害で適切な対応を行うためには何よりも災害訓練を反復しておくこと、そして職員たちがモチベーション高く災害医療に臨むことができるよう、職員たちの生活を守り、休息を確保して、常に万全な状態で災害と闘うことができる体制づくり

が、災害医療にとって非常に大切であると感じました。

当院は宮城県の基幹災害拠点病院であり、地域、そして県の救命救急医療を支える最前線の病院として、高水準の災害・救急対応能力を学ぶことができる環境です。当院で研鑽を積むことは医師としての大きな力になると確信しています。



PROFILE

出身地 : 山梨県
出身大学 : 東北大学(1987年卒)
宝物 : 家族
座右の銘 : 朝が来ない夜はない

INTERVIEW.

02 熊本大地震から5年 国立病院機構 熊本医療センター

積み重ねてきた災害訓練と地域連携、 そしてNHOであることが大きな助けに

熊本医療センター 院長 高橋 毅

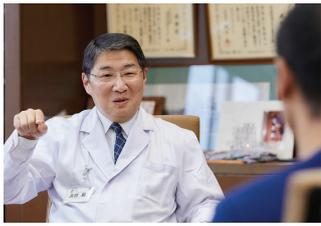
熊本地震を経験して改めて感じたことは、災害訓練がいかに大切だということです。震災時は30分ほど停電しましたが、職員たちはパニックに陥ることなく各々の取るべき災害時の行動が自然とできていました。

災害訓練は阪神淡路大震災が起

きた1995年から毎年実施していますが、東日本大震災を機に、災害時の厳しい状況を想定した訓練を行ってきました。

熊本地震では院内エレベーターが停止してしまい、1階にある調理場から5階以上にある病棟へ患者





さんの食事を運べなくなったり、患者さんが病棟に上がれない事態が起きましたが、同じ状況を想定した災害訓練を実施していたため、誰に指示されなくとも自然と職員が階段に並び、手渡しで配膳をしたり、患者さんを担架に乗せて病棟に上げるなど、訓練通り誰一人慌てることなく対応することができました。

また、熊本地震ではガスが止まったことを踏まえ、電気、ガス、水道などの重要なライフラインを維持するためにそれぞれ2つの供給源を確保するなど、災害時にも業務の中断や病院機能が停止しないよう事業継

続計画(BCP)を策定し、更なる災害対策の強化に向け取り組んでいます。

熊本地震によって機能停止した熊本市市民病院の入院患者さんを最も受け入れたのが当院です。臨時のベッド数を確保するために病院周辺の有床診療所の先生方をお願いをして、病状が落ち着いていた入院患者さんを引き受けていただきました。こうした対応が迅速にできたのは、長年にわたり地域の医療機関と連携を密にし、「顔の見える関係」が構築できていたからです。災害医療は近隣の医療機関との協力なしでは対応できません。長い時間をかけて築いた「顔の見える関係」があったからこそ協力を得ることができ、迅速な対応が実現できたと感じています。

さらに、NHOというグループ病院であることも震災時の大きな助けと

なりました。震災直後から人、物資の支援があり、当院には1,300人程の職員がいますが、院内で水や食糧に困ったことは全くありませんでした。

職員たちの家はライフラインが止まっており、怪我をしていたり、家族や家が大変な状況になっているにも関わらず、「困っている人、患者さんを助けたい!」という強い想いで病院にいました。小さなお子さんのいる職員は病院に出たくとも子どもの世話をしてくれる施設が震災で閉鎖されてしまったため、早急に簡易的な保育所を院内につくり対応しました。こうした災害時にも医療を継続させる取り組みは、今般のコロナ禍においても活かされています。

あらゆる事態を想定した負荷を加えた災害訓練を実施していたこと、長年にわたって密な地域連携を

築いていたこと、そしてNHOというグループ病院であったことが災害を乗り切ることができた要因であると思います。そして何より、大変な状況でも病院に出て対応にあたった職員たちの意識の高さは本当に尊敬できることであり、当院の大きな誇りであり、病院としての強さだと感じています。



PROFILE

出身地 : 熊本県熊本市
出身大学 : 宮崎医科大学(1985年卒)
宝物 : 仲間
座右の銘 : みんなで頑張ろう



災害医療、救急医療に強い病院で 医師として成長する意義

熊本医療センター
救命救急センター長・救命救急部長 原田 正公

熊本医療センターの診療の大きな柱の一つが救急医療(3次救急)です。普段から他科と密な連携を取りながら、多彩な患者さんを診ている救急医療は災害医療と親和性がとても高く、救急医は災害時であっても普段通りの実力を発揮しやすいため、熊本地震の際も救急医が全体のまとめ役として対応にあたりました。

災害医療や救急医療はセーフティネットとして日本で重要な医療であるにも関わらず、救急医が増えていない現状があります。救急医療には医師としての基本がたくさん詰まっており、多彩な患者さんを診療しながら、自分の得意分野を見つけ、専門を深堀していくという楽しさもあります。また、救急医療と集中治療はオーバーラップする部分が多く、多くの救急医は集中治療医でもあります。治療が難しい患者さんが助かったときの達成感や喜び

もひと際大きく、とてもやりがいのある診療科です。

急病の患者さんの初期対応をし、適切な診療科に相談したり、救命処置を行ったりすることは医師としての基本です。災害医療、救急医療に強い病院である当院でなら、幅広い知識や技術の習得、迅速で柔軟な対応ができる能力、そして人間性にも優れた医師へと成長することができるでしょう。



PROFILE

出身地 : 宮崎県
出身大学 : 熊本大学(2002年卒)
宝物 : 家族
座右の銘 : なんとかなる